

## Dさんがなくした物

仕事を取り合って言い争いをするくらいに、お仕事大好きなDさんが退院後「花風屋」に復帰することを待ち望んでいたのはスタッフのみならず、下宿人やミニデイ利用者すべての人でした。

私は、事あるごとに「Dさんがいてくれたら、もっと仕事はかどるのにね」「そんな雑な仕事すると、Dさんが復帰したらチェックが入るよ。テールたいて、怒つちゃうんだから」「この音楽聞いたら、きつとDさん踊るよね」など、仲間であるDさんを忘れないように、復帰の時には大喜びしてもらえるように、みなさんに話し掛けていました。

私も、四度の入院を繰り返して職場復帰するたびに、職場の仲間迷惑を掛けたにもかかわらず大歓迎してくれて、「私の居場所がちゃんと残っていた」と、安心したものです。Dさんには、下宿のほかにもう一つ居場所があるんだと安心してもらい、入院前と同じようにとはいかなくても元気になるってほしかったのです。

ところが、期待が裏目に出てしまいました。タオル畳みはどうにかできるようになりましたが、それ以外は「できない。できない」

と、言い、何度お願いしてもしてくれようとはしません。そして、歌を歌ってもらおうと、

「三百六十五歩のマーチを歌いませんか？」と話し掛けると「そんな歌は歌えませんが、私に話しかかれては、どうですか？」

「そう言っ  
て、私と一  
緒に歌を

# 花風屋繁盛記

連載27

## 人と人がつながって



NPO法人在宅生活支援  
サービスホーム花風

木村美和子理事長

Dさんは歩けな  
いことに  
端を発し  
て、すべ  
てのこと  
に自信を  
なくして  
いたので  
す。Aさ  
んが張り  
切ってダ  
スター切  
りをして  
いる姿を  
見ること  
で、「自分  
はこんな  
にも、で  
きなくな  
ってしま  
った」と  
思ってい  
ました。ま  
た自信を  
なくして  
しまうの  
でした。

### Dさんが得た物

ノンビリなくなると

思っている物を取り戻すには、伴走してくれるペースメーカーが必要だと考えた途端に、最適任者を思い付きました。七十代の本間スツフです。彼女自身、たくさんの喪失体験をしたであろうに、愚痴を言うどころか、その体験を人への思いやりに変えているような人です。早速、勤務日にDさん

「大きくなって一人で切るペースメーカーが必  
持っていたら助かるんですけど」  
と、話し掛けました。  
「私にできるかい？」  
「ここがいいのかい？」  
「良いです。しっかりと持っていてください」  
「一人では難しいことと答えていました。」  
「一人ですらできることはたくさんあります。そんな当たり前で、たやすくできることがなかなかできないのが現実です。」  
その後、二人の二人三脚は続いて良いコンビになっていきまし



「亀が歌えば鶴は踊り」と「目出度節」。ちどりが歌い、復活Dさんが踊った。最高！

二人の会話はテンポよく続き、大きなバスで、「目出度節」の軽快なリズムにこらえきれなくなった様子で、私を支えに歩いて踊り歩くまでになりました。

Dさんが来店するたびに「Dさんに手伝っていただきおかげで、楽に切れました」

本間スツフの「あがりがどう」の伝え方が真を披露します。どうですか？ 光り輝いて

「沖繩民謡」  
「もう少し若いときにここで踊ったんだよ」  
「と、言いながら久しぶりに手振りして踊りました。」  
「下旬には、